

委員会の調査と検証

委員会は、火山パートのチーフ格を務めたAディレクター、田中委員長の記者会見にテレビ朝日から唯一出席した社会部のB記者のほか、番組のプロデューサーや報道局幹部ら11人に対し、計12時間半にわたる聴き取りをした。テレビ朝日の報告書や資料、本件放送や訂正・お詫び放送、『報道ステーション』で放送された川内原発関連のニュースなどを録画したDVDも参考にして、本件放送の経緯と誤りの原因を検証した。

1 『報道ステーション』の制作体制

テレビ朝日報道局にはニュースセンターと情報センター、映像センターなどがある。ニュースセンターは『報道ステーション』と夕方の『スーパーJチャンネル』などのスタッフとともに、「出稿部」と呼ばれる政治部、経済部、社会部、外報部の記者たちを抱えている。出稿部は報道局の各番組に対し、ストレートニュースの原稿を出すだけでなく、企画を提案し、番組で使われるナレーションの原稿をチェックする役目も担っている。

『報道ステーション』と『スーパーJチャンネル』のスタッフの席は報道局のメインフロアの端にあるが、当日の作業はスタジオや副調整室（サブ）に近いニュースルームで行われる。ここから専用階段を上れば、1階上の編集ブースに至る。

『報道ステーション』では、プロデューサーの下に5人の総合デスクがいて、日替わりのローテーションでその日の放送全体に責任を持つ。総合デスクは日替わりのニュースデスク、スポーツデスク、気象デスク、特集デスクらと内容を吟味し、項目の順番や時間の配分、放送中の進行を決定する。

ニュースデスクはテレビ朝日の社員5人がローテーションで担当する。当日のニュースのラインアップを決め、ディレクターを配置する。ニュース班のディレクター約50人の内訳は、社員10人、テレビ朝日系列局からの出向社員が4人で、あとは制作会社などからの社外スタッフである。毎日、ニュースの項目ごとに割り振られるチーフ格のディレクターを中心にして、取材から編集までチームが作られる。

本件放送の主な関係者は以下のとおりである。

Aディレクター	火山パートのチーフ格、VTR原稿作成、社外スタッフ、40代後半
B記者	社会部原発担当、社員、50代前半
Cプロデューサー	社員、40代後半
Dニュースデスク	社員、40代前半
Eディレクター	避難計画パートのチーフ格、社員
Fディレクター	火山パートのサポート役、文字起こしも担当、社員
Gディレクター	火山パートの編集担当、社外スタッフ
Hディレクター	火山パートの編集担当、系列局からの出向社員

この番組での一般的なVTR作成のプロセスを見てみよう。昼すぎにニュースデスクが項目ごとにチーフ格のディレクターを決める。チーフ格はナレーション部分の執筆、撮影・収録された映像と音声を使う「音生かし(オン)」の部分の取舍選択をして「VTR原稿」を作成する。「構成」とも呼ばれる重要な仕事で、編集はこの原稿に基づいて行われる。

チーフ格のディレクターがさまざまな情報を集め、原稿の執筆に当たる間、別のディレクターが報道局に入ってきた映像素材の内容を吟味する。記者会見やインタビューなどの映像素材の場合、当事者と質問した記者らの発言をその時刻(タイムコード)とともに詳しく文字にする「文字起こし」が欠かせない。VTR原稿の作成や編集の際に必要なこの作業は「起こし」と呼ばれる。チーフ格がいつも自ら映像素材を確認するとは限らず、文字起こしに目を通して、記者会見の中身や映像素材の内容を把握するケースもある。

本件放送の関係者たちへの聴き取りでしばしば耳にしたのは、「追い込み」という言葉だった。「VTRの編集などが放送に間に合うかどうか、ぎりぎりの作業になる」という意味である。「もっと早く取りかかっていたら、あんな追い込みにはならなかったのに……」と悔やむ声を複数の関係者から聞いた。追い込みを招いた理由を探ると、「空白の3時間」とも言うべき事情が浮かび上がってきた。

2 「空白の3時間」はなぜ生じたか

9月10日のニュースについては、Dニュースデスクが責任を負う立場にあった。火山パートのチーフ格のAディレクターは『ニュースステーション』時代からかわり、『報道ステーション』でも派遣契約という形で働いている。原発・エネルギー問題に詳しいベテランのディレクターとして、川内原発の問題では何度もチーフ格を務めてきた。

田中委員長の記者会見は東京・港区の原子力規制庁庁舎で10日午後2時半ごろか

ら始まり、3時40分ごろ終わった。本件放送は午後10時14分から始まった。番組の放送開始を間近に控えて発生した事件・事故や緊急の記者会見などならいざ知らず、田中委員長の会見終了から本件放送まで6時間半以上もの時間的な余裕があった。

しかし、Aディレクターらが追い込みの作業を余儀なくされ、2つの誤りにつながったのは「空白の3時間」が生じたためである。

CプロデューサーやDニュースデスクらは前日から、「川内原発の項目は、事故発生時の住民の避難計画に重点を置く」と決めていた。火山の審査基準については、5月30日放送の特集「火山学者が異論 川内原発の審査基準」や、原子力規制委が川内原発の審査書案をまとめた7月16日の放送で詳しく報じていたからである。昼すぎ、この項目のチーフ格としてEディレクターが指名された。

午後3時ごろ、CプロデューサーとDニュースデスク、番組の統括役のエグゼクティブプロデューサーらの打ち合わせで、本件放送ではまだ完成していない免震重要棟など重要施設の問題も扱うことが確認された。田中委員長の定例会見にはB記者だけが出席したが、代表取材のカメラによるこの映像と音声はリアルタイムでテレビ朝日の報道局に伝送された。2人のディレクターが午後3時ごろから、会見のやり取りの文字起こしを交代で担当した。2人とも避難計画がクローズアップされると聞いたため、火山についてのやり取りの文字起こしは途中から省いていた。

この翌日には、福島第一原発事故について東京電力の吉田昌郎・元所長の聴き取り調査をまとめた政府の「吉田調書」が解禁される予定だった。Aディレクターはその準備を進めていたため、10日の放送には関与しないはずだったが、川内原発の問題を何度も手がけた経験から火山の審査基準をめぐる問題点は認識していた。Cプロデューサーは、メインキャスターも交えた午後4時半からの打ち合わせにAディレクターも呼び、この問題点を説明してもらった。しかし、この時は「尺（放送時間）がないので、原稿（ナレーション）で触れよう」ということに落ち着いた。

CプロデューサーもDニュースデスクも、田中委員長の会見では新しい話はないだろうという先入観があり、会見の中身や雰囲気についてB記者や、文字起こしを担当した2人のディレクターに問い合わせをしなかった。一方、2人のディレクターからも「質問が火山に集中しているが、これは扱わなくていいのか」という声は上がらなかった。

記者会見に出席したB記者はどう動いたのか。番組側から事前に連絡はなく、B記者は当初、『報道ステーション』が川内原発のニュースをどう扱うか知らなかった。田中委員長の会見内容を聞いても、火山については驚くような発言がなかったと受け止めた。会見が終了した後は本社に戻り、『スーパーJチャンネル』用に「原子力規制委員会が川内原発についての審査書を正式に決定した」というストレートニュースの原稿を書き、編集にも立ち会った。このニュースが放送された後、会見要旨のメモをま

とめ、午後6時半すぎ、報道局などの原発担当スタッフたちに送信した。

『報道ステーション』が一転して、本件放送で火山パートを取り上げることになったのは、B記者のメモがメールリストで送信されたことがきっかけだった。午後7時前後、Aディレクターがメモに目を通し、火山に質問が集中していることをCプロデューサーに伝えた結果、チーフ格として火山パートを担当することになった。田中委員長の会見終了から火山パートの着手までの間に、「空白の3時間」が流れた。番組の放送開始まで残り3時間を切り、追い込みの作業を余儀なくされたことが、2つの誤りの遠因になった。

3 「追い込み」のVTR原稿作成と編集

放送では、メインキャスターらのコメントを含めて約8分間に及んだ本件放送のうち、VTRの前半の避難計画パートに約3分、後半の火山パートには約2分半が割かれた。このVTR原稿作成と編集が追い込みの分業作業になった経緯は、かなり複雑である。スタッフの動きを時系列で追い、整理してみよう。

）午後8時ごろ

AディレクターはB記者のメモなどを基にして火山パートの構成を考えているうち、火山をめぐる質疑応答の部分の文字起こしが省略されていることに気づき、「誰か、早く起こしてくれ」と大声を上げた。当初から記者会見の文字起こしを担当した2人のディレクターは避難計画パートのVTRの編集をしていたため、Aディレクターのサポート役として電話取材などに当たっていたFディレクターが、自発的に省略部分の文字起こしを始めた。

）午後9時前後

Fディレクターは追加の文字起こしを終えた後、避難計画パートのチームに戻った。避難計画パートを担当していたGディレクターは編集の分担表を見て、自分が火山パートの担当に回されたことを知った。

）午後9時20分ごろ

Aディレクターが火山パートのVTR原稿を書き上げる。田中委員長の会見の映像やすべての文字起こしを見る余裕はなく、火山に関する部分の文字起こしに目を通しただけだった。

）午後9時半ごろ

Gディレクターは放送まで1時間を切り、ひとりで2分半の編集をするのは無理と判断し、避難計画パートのチームにいたHディレクターに応援を頼んだ。前半と後半に分割し、Hディレクターに後半の編集を任せ、2人でVTR原稿に従って編集作業を進めた。

午後10時14分

『報道ステーション』で本件放送が始まる。火山パートのVTRはぎりぎり放送に間に合った。

関係ディレクターの分担作業の流れ

		当初文字起こしの ディレクター2名	Aディレクター	Fディレクター	Gディレクター	Hディレクター
午後1時		避難計画 パート 各種作業				
午後3時	田中委員長 記者会見	記者会見 文字起こし		避難計画 パート 各種作業	避難計画 パート 各種作業	避難計画 パート 各種作業
			打ち合わせ出席			
午後7時	火山パート決定	避難計画 パート 各種作業		電話取材等		
		避難計画 パート VTR編集	火山パート VTR原稿 作成等	会見の追加 文字起こし		
午後10時	9:54~番組開始 10:14~本件放送			避難計画 パート 各種作業	火山パートVTR編集	

* 部分は火山パート関連作業

こうして経過をたどると、日々、時間と競争するようにして綱渡り的な作業を迫られるテレビ報道の現場のあわただしさが目に浮かぶようである。新聞や雑誌の世界でも締め切りや校了の時間が間近に迫ると、胃が痛くなるような思いに駆られることは少なくないだろう。これは報道の仕事に携わる人間の宿命とも言える。

しかし、本件放送の大きな問題点のひとつは誰が記者会見の全容を把握していたかである。Aディレクターをはじめとして、急きょ火山パートのチームに入り、文字起こしなどを担当したFディレクター、編集作業を担当したGディレクターとHディレクターも記者会見の映像や文字起こしのすべてに目を通す時間的余裕はまったくなかった。

一方、記者会見の全体像を把握していたB記者は、自分が書いたストレートニュースが『スーパーJチャンネル』で放送されたのを見届けた後、報道局のオープンスペースで翌日解禁予定の膨大な吉田調書の読解作業を始めた。午後9時20分ごろ、A

ディレクターが仕上げた火山パートのV T R原稿が届けられた。B記者はナレーションの部分を熟読し、不正確な記述がないかチェックした。しかし、田中委員長の発言を使うオンの部分は間違えるはずがないという思い込みがあり、つい読み飛ばしてしまったという。

当初、記者会見の文字起こしを担当した2人のディレクターも映像で会見の流れをつかんでいたが、避難計画パートのV T Rの編集作業をしていたため、火山パートのV T Rの誤りはわからなかった。チーフ格のAディレクターとEディレクターのどちらかが、この2人に火山パートのV T R原稿かV T Rの確認を指示していたら、事実誤認や不適切な編集に気づいた可能性がなくもない。

4 事実誤認と不適切な編集の原因

事実誤認と不適切な編集の直接的な原因は、Aディレクターが書いたV T R原稿が間違っていたことである。

午後7時前後、火山パートが急浮上したのは、Aディレクターが「火山に質問が集中している」と注意を喚起したからである。CプロデューサーもDニュースデスクも原発問題ではAディレクターを信頼し、本人も「追い込みになるが、自分ならできる」という自負があったと思われる。結果論になるが、いずれも「過信」と言うほかない。

それでは、事実誤認はなぜ生じたのか。当初の文字起こしを担当した2人のディレクターは、火山に関する質疑応答の文字起こしを途中から省略していた。竜巻の審査基準をめぐる質疑応答についても、最初の質問だけ文字にし、残りは省いていた。その後、省略部分の文字起こしに取り組んだFディレクターは、追加した部分が一目でわかるようにと、それまでの細字の書体ではなく、太字で書き込んだ。時間に追われていたAディレクターは、太字の部分に重きを置いて目を通したため、細字で書かれていた竜巻についての質問に気づかず、竜巻と火山の質疑応答を取り違えたまま、V T R原稿を書いてしまった。

不適切な編集については、次のような経過をたどった。

田中委員長の「答える必要がありますか。なさそうだからやめておきます」という発言について、AディレクターはGディレクターに対し、X記者とY記者の質問の間で白飛ばしという手法を用いるよう指示した。Aディレクターは火山の審査基準について強い問題意識を抱いていただけに、火山に質問が集中したことを強調したかった。「現在の科学の知見をねじまげて審査書を出せば、いわゆる安全神話の復活になるのではないか」という2番目のY記者の質問の後、田中委員長が「答える必要がありますか」というやり取りは短くずっと入れられるので、「現場感が出る」と考えた。1問目と2問目の間に「白」を入れたことで、田中委員長が1問目への回答を拒んだようには受け取られないだろうと、自分なりに解釈したようである。

田中委員長の発言を割愛したため、田中委員長が回答をすべて拒否したような印象を与えた点について、Aディレクターは原子力規制庁から抗議されるまで局内の誰からも指摘されず、自分でも気がつかなかったという。テレビ報道の現場では、政治家や有名人らの印象的な言葉を短く抜き出して使用することを「サウンドバイト」と呼ぶそうである。Aディレクターは文字起こしの一問一答を見て、サウンドバイトとして使えると飛びついたようだが、ベテランらしい慎重さを欠いたと言わざるを得ない。

このVTR原稿はCプロデューサー、Dニュースデスクのほか、B記者の手にも渡ったが、この時点で違和感や疑問はいっさい出なかった。Dニュースデスクは「答える必要がありますか」という田中委員長の発言について、回答をすべて拒んだと受け取った。改めてAディレクターに念を押すこともなく、そのまま通してしまった。

5 「分業体制」の背景と本件放送の問題点

ここでは、テレビ報道の現場で加速している分業体制の背景とともに、泥縄式のチーム編成など本件放送の問題点を指摘したい。

ひとりのディレクターが少人数のスタッフとともに長期間にわたって取材対象に密着し、編集にも一から十まで立ち会うドキュメンタリーと異なり、生放送の報道番組では今や、分業体制が不可欠となっている。限られた時間の中でより多くの情報や映像を集め、効率的に編集し、放送に間に合わせるためには、多くのスタッフがさまざまな作業を同時並行で分担せざるを得ないからである。

報道局のあるベテランは「『ニュースステーション』の初期はディレクターが5分程度の項目を自分で取材し、編集までこなす“牧歌的な時代”だった」と振り返った。関係者の話を総合すると、『報道ステーション』で分業が進んだ理由として以下の点が挙げられる。

i) 夕方のニュース番組枠の拡大

午後6時台に並んでいた民放キー局の夕方のニュース番組は1990年代後半、放送時間が一気に拡大し、午後5時台から6時台を中心に2時間余りの枠が定着していった。今では約3時間に拡大させた民放キー局もある。テレビ朝日の場合、『報道ステーション』のスタッフが編集ブースを使えるのは『スーパーJチャンネル』の後になるので、いっそう時間に追われるようになった。

) 『報道ステーション』固有の事情

NHKは別にして、ほかの民放キー局の夜のニュース番組は夜11時台中心に放送されている。これに対し、『報道ステーション』は前身の『ニュースステーション』を受け継ぎ、民放キー局で唯一プライムタイム(午後7時から11時)の時間帯に食い込んでいる。このため、他局に比べて1時間以上、編集作業などが前倒しになるという時間的制約を抱えている。

）新たなライバル出現

インターネットが浸透し、ネットを通じて流されるニュースが、速報性を武器にしてきたテレビのニュース番組の新たなライバルとなってきた。以前にも増して、新たに発生した事件・事故など最新の動きに素早く対応することが求められている。

）容易になった編集

技術的には、デジタル化によって編集作業が以前よりかなり容易になったという事情もある。

『報道ステーション』では、突発的なニュースは別にして、記者会見やインタビューなどの文字起こしを担当したディレクターがVTRの編集も手がけることは暗黙の了解とされていた。しかし、火山パートの場合、追加の文字起こしや編集作業に携わるディレクターたちは急場をしのぐように決まっていた。たとえば、チーフ格のAディレクターは、Gディレクターが「ひとりでは放送に間に合わない」と判断し、Hディレクターに編集の応援を求めたいきさつを知らなかった。

Dニュースデスクはニュース全般の目配りに忙しく、AディレクターもVTR原稿の作成に追われ、個々のスタッフの動きや役割、作業の進み具合をきちんと把握していなかった。火山パートにかかわったディレクターたちも自分の分担作業をこなすのに気を取られ、火山パート全体に関与するという意識が希薄だったことは否めない。番組スタッフとB記者とのコミュニケーションも十分とは言えなかった。いくつもの理由が重なり、AディレクターのVTR原稿をチェックするという機能は働かなかった。